

# プラットフォームシフティングインプラントを使用した下顎臼歯部症例

樽味 寿(兵庫県開業)

## 症例の概要

本症例は、対合となる天然歯(5 6 7)が挺出し、鉤歯の破折により抜歯となった下顎臼歯部(5 6 7)にインプラント治療を行ったものである。患者は、数本の臼歯が治療を繰り返して抜歯に至った経験を持っており、対合歯の切削を希望されなかった。幸い、費用的問題がなかったため、3本のインプラントを埋入し、ゴールド連結冠にて機能を回復させた。インプラント埋入から約1年半、何でも噛めるので患者は非常に喜んでいる。

## 処置内容とその根拠

患者は上顎欠損部(7 6 5)にノンクラスプ義歯を装着しているため当初は同様の処置を希望されたが、固定式の補綴処置が可能である長所に興味を示し、インプラント治療を選択した。対合歯との空隙が不足しており技工操作は困難であったが、ゴールド連結冠の経過は良好で、デンタルX線写真ではプラットフォーム部に骨のわずかな造成も認められる。今後インプラント部のみならず、対合歯や顎関節についても経過観察していく。



図1 術前のパノラマX線写真。左下大臼歯部に破折由来のX線透過像が認められる。



図2 術前の下顎咬合面観。破折部が鉤歯の部分床義歯が装着されている。



図3 術前の上顎咬合面観。右側にはノンクラスプ義歯が装着されている。



図4 術前の患部側方面観。対合天然歯の挺出を認める。



図5 術直後のX線写真。アンキロスインプラント(5部:9.5mm、67部:11mm)を埋入。

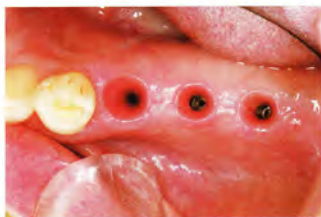


図6 アバットメント装着直前の歯肉。5部がやや深めに埋入されている。



図7 アバットメントの装着。



図8 補綴物の装着。対合歯との空隙が少ないため、ゴールド連結冠を選択した。



図9 術後1年半の下顎咬合面観。特に問題となる部分は認められず、経過良好である。



図10 術後1年半の上顎咬合面観。咬耗など対合歯にも変化は認められない。



図11 術後1年半の患部側方面観。辺縁歯肉に発赤・腫脹は認められない。



図12 術後1年半のX線写真。プラットフォーム部に骨のわずかな造成が認められる。